

親を夢む（細井平洲）

芳草 萋々として 日々 新たなり

人を 動かして 帰思 春に 勝えず

郷関 此を 去る 三千里

昨夢 高堂 老親に 謁す

芳草萋萋日日新 動人歸思不勝春
郷関此去三千里 昨夢高堂謁老親

解説 春に当たつて故郷を思い、夢で両親に会つたことを歌つたもの。

語釈 ※芳草Ⅱにおやかな草。※萋萋Ⅱ草の茂つたさま。※日日新Ⅱ日ごとに新しく生長する。※帰思Ⅱ故郷に帰りたいと思う情。※郷関Ⅱふるさと。くにもと。※三千里Ⅱ実数ではなく、ただ遠いことをいった。※高堂Ⅱ立派な家の意であるが、両親の住まい。

通釈 芳ばしい草が勢いよく伸び、その生長ぶりはわずか一日でも目を見張るばかりで、人の心を動かし、家に帰りたい気持ちがしきりに起こつて、いてもたってもいられない。だが、その故郷はここから遠くはるかに隔つていて、帰ることもできない。しかし、昨夜は、夢で家に帰り、年老いた両親に会うことが出来た。夢の中ではあったが、両親に会えたのは、嬉しいことであつた。